

プールを中心に考えた理想の住まい



Vincent Tai

[FILE 03]

ヴィンセント・タイ

サンフランシスコから移り住み、タンタラスの丘で暮らすヴィンセントさん。建築家である彼が建てた家は、「バウハウス」のアートにインスパイアを受けており、色使い、デザインともに、ハワイらしさ、とは一線を画した魅力に溢れる。そんな家に秘められた設計のこだわりやハワイでの暮らしを伺った。



家の中心は吹き抜けに。右ページの写真がリビングがある2階部分、左ページは1階のプール。階段は光を通すために、板を使用しないデザインを採用した。建築素材に詳しいヴィンセントさんが選んだ、光を通して熱を通さない特別な素材を天井に数カ所使用し、室内の明るさをキープしている



白、青、赤、黄色、黒の組み合わせが「パウハウス」を代表する色使い。プールの床のタイルはそれらで構成されている。タイルの数をびったりオーダーするために何度も計算し直したという。建築素材はハワイにもある有名ホームセンターの『ホーム・デポ』などを通して入手したものも多い。「1日に2回は通ったよ」とヴィンセントさんは当時を振り返る。リビングを見渡してみるとバルセロナ・チェアからル・コルビジエのLC4シェーズロング、イームズのラウンジチェアにオフィスチェア、ダイニングテーブルと誰もが憧れるブランド家具がずらりとそろそろ。それらが、香港などアジアの雰囲気を持つヴィンテージ家具と調和する。ラナイからはホノルルの街を望む。雨も多いが、涼しいエリアゆえ、外で過ごすことも気持ちがいい



大きな窓からは、ヴィンセントさんが育てるパパイヤやアボカド、バナナなどの自慢の木々を望む。熟した実や果実はキッチンに並べてスムージーなどに。家はいかにも豪邸といった雰囲気だが、「実は『IKEA』で入手したパーツや家具も使っているだよ。言わない限り気づく人はいないけどね。お金をかけるばかりが正解じゃないんだ」とにっこり



20世紀を代表する名デザインがそこかしこに

時間体制で働くような忙しい日々を過ごしていた。その生活のペースをもっとリラックスしたものに換えようと、2004年にハワイに移ってきたそう。ハワイでの1軒目となる家を2006年に完成させしばらく暮らした後、現在の家を建てたのは2012年。

念願のプールで週に5回泳ぐことが健康の秘訣か、75歳という年齢はにわか信じがたいほど。家の中にはほとんどドアがないが「だって、僕くらいの歳になるとドアを開けるだけで何をしようと思っていたか忘れちゃうからね(笑)」とおどけてみせる。実のところは、エアコンを使わず、風の通りを優先して、ドアがない設計となっているのだが。

2階部分の天井が高いホールにはグランドピアノの置き、オペラを習う奥さまがパーティーを開くことも。20〜30人を招いての華やかな時間だ。暖炉はあまり使わないがロマンチックだから作ったというのも大人の回答だ。

「今の仕事はこの家を手入れすること。家は人と一緒に成長するものだからね」といい、時間にゆとりのある生活を奥さまとともに楽しんでいるようすが伝わってくる。誰もが夢見る「老後はハワイ」を実践する彼は、「気候がよく空気がキレイなこの場所で過ごせることは幸せだよ」と語った。

タンタラスエリアにあるヴィンセントさんの邸宅。丘の斜面にあり、ワイキキよりも10度は気温が低いというこのエリアで、通り抜ける風と差し込む光を大切に、家を建てた。自身は建築家であり、現場責任者と不動産ブローカーの資格を持ち、設計から現場まで、この家のすべてを手がけている。

家の一番大切なポイントは20mあるプール。豪邸にあるような屋外のプールはどうせ誰も泳がないしケアが大変だからと、室内にプールを作ることを始めから考えていた。斜面に建つ家は、居住スペースとして使える部分が少ないそう。1階にプールとオフィス、ベッドルーム、2階はリビングルーム、キッチン、ホールとなっている。ただ、坂の街サンフランシスコから移り住んだヴィンセントさんからすれば、「こんなのは坂に入らない」と言わせるほど。空間を無駄なく、広々と使っていることに驚くほどだ。

香港出身のヴィンセントさんは、NYや香港、サンフランシスコで働き、特に建築事務所を経営していたサンフランシスコ時代は、24

長年愛用する家具とアートが家を彩る



グランドピアノが置いてあるホール部分は、天井高が最大で16フィート(約5m)ある。一般的な8〜9フィート程度に比べ開放感が抜群。アートも多数飾られており、アーティストだった妹さんの作品や甥が作ったもの、壁に色味が欲しいからと自分で書いたものまで、思い出がたくさん詰まった作品達だ。家の外観はハワイでは珍しい雰囲気が目を引き